

地獄先生ぬ〜べ〜  
× BLEACH — 最強の霊  
能教師と死神代行

桂ヒナギク

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

死神代行の翔は久しぶりに会ったぬくべくたちと楽しい一時を過ごす。

# 目次

E  
p  
i  
s  
o  
d  
e  
1  
|  
死神代行

1



## Episode 1 | 死神代行

俺は熊谷くまがい 翔しょう。かつて、童守どうもり小学校しょうがっこうに通っていた、五年三組の鶴野つるの 鳴介めいすけ先生、通称ぬくべくの教え子である。

今、俺は童守町の隣にある、空座町からくらちやうに住んでいる。

ここ、空座町は、童守町のように霊がよく現れる。

小学校に通っていた当時、俺は極度の霊媒体質で、妖怪に取り憑かれては、ぬくべくに救ってもらっていた。

ぬくべくは左手を失っており、その代わりに霸鬼バキという鬼を封印して、鬼の手にして使っていた。

鬼の手はあらゆる霊を切り裂くことができる最強の武器であるが、これはピンチの時にか開放したことがないのである。

俺は今日、童守小学校の同窓会に参加するべく、童守町を訪れていた。

「童守町は変わんねえなあ」

童守町の様子は当時と比べてもあまり様変わりはしていなかった。

俺は集合場所である、童守小学校へ足を運ぶ。

「翔！」

当時のクラスメイトが駆け寄ってくる。

彼は立野 広たての ひろし。今は全国に名を馳せる元サッカーの選手だっけか。確か足の怪我で

引退したんだよな。

「久しぶりだな、広。聞いたぞ、郷子と結婚したんだってな」

俺は辺りを見渡す。

「翔！」

郷子が姿を現す。

「二人とも、おめでとう」

「ありがとう。翔は今、仕事は何してるの？」

「俺は死神代行をやってるよ」

「死神代行？」

「ほら。俺、小学校のころ霊に憑かれまくってたろ？俺、当時から秘められた力を持つ

ててさ。最近になって、それが発現したんだよ」

「ふーん。で、死神代行って？」

「死神ってのは尸魂界ソウルソサエティ……つまりあの世にある職業の一つさ。未成仏霊を導いたり、虚ホロウって悪霊を倒すのを生業にしてるんだけど、俺はこっちで目覚めたから、仕事がない

ときは代行という形で働いてるんだ。ちなみに、こっちでは警察官をやってる」

「翔くん、警察官なの？」

割って入ってきたのは、菊池きくち 静しずかだ。

「菊池？」

「そうだよ。私も童守警察署の警察官なんだ」

「俺は空座警察署にいる」

「そうなんだ」

「ぬ〜べ〜は？」

「校舎内に入るよ。行ってみようか」

俺たち四人は、校舎に入った。

ぬ〜べ〜は宿直室にいた。

「ぬ〜べ〜！」

「おう！ 翔じゃねえか。それにみんなも！」

俺を見たぬ〜べ〜の表情が変わる。

「翔、話がある」

ぬ〜べ〜が俺を屋上に連れ出した。

「お前、本当に翔か？」

「そうだけど？」

「以前の翔とはどこか違うように感じるのだが」

「ぬくぬくにはお見通しか。俺、死神になったんだ」

「死神？」

「うん」

俺は代行証を見せた。

「死神代行戦闘許可証。現世で生まれた死神に尸魂界から与えられる免許みたいなもの」

「子どものときから只者じゃないと思ってはいたが、そんな能力があつたのか」

「グオオオオオ！」

ん？

「なんだ今の？」

「虚だ」

「虚？」

「うん。悪霊だよ。妖怪とは別の……」

叫び声の主である虚が、俺たちの前に現れる。

「これが虚？」



「イイ匂イガスルナア」

俺は代行証で肉体から飛び出し、斬魄刀ざんぱくとうという大刀を構える。

「おいおい、せつかくの同窓会を台無しにするんじゃねえよ」

俺は虚に斬りかかった。

ミス。虚は斬撃をかわした。

俺は空中に靈子の足場を作り、方向転換をして再度斬りかかる。

「グエエエエ！」

右腕を一本削ぎ落とした。

「貴様、俺ノ腕ヲ！」

「ウザイ」

俺は斬魄刀で虚の首を撥ね飛ばし消滅させた。

「こつちの翔はどうなってんだ？」

「そつちは今、空っぽだよ」

俺は肉体へ重なった。

「戻ろうか」

俺とぬくべくは校舎に戻るのであった。